No. 36 (May 2024)

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

日本ギャスケル協会ニューズレター

次世代のGaskelliansへ

第6代会長　大野　龍浩

2期4年（2020年4月-2024年3月）務めた会長職を引き継ぐに当たり、任期中に起きたことを振り返り、今後の展望を示す。次世代のそして未来の協会員たちのための記録。

2020 年
4 月 1 日
第 17 期役員（敬称略）
副会長：松岡光治／事務局長：芦澤久江／幹事：宇田和子、遠藤花子、閑田朋子、齊木愛子、瀧川宏樹、玉井史絵、西垣佐理、松本三枝子、村山晴穂／会計監査：猪熊恵子、早川友里子
4 月～21 年 9 月
最初の仕事は、前体制から引き継いだ「19 世紀イギリス文学合同研究会」問題。参加した場合の運営方針を決めるため、発起人の新野緑先生を中心に、関心を示した学会の会長による Zoom 会議が、準備大会開催直前まで断続的に開かれる。
4 月末
会費納入依頼文書作成。
5 月 1 日
Newsletter（No. 32）発行。
6 月 6 日
本協会の年間活動報告を英国 Gaskell Society に送る。
6 月 20 日
『ギャスケル論集』投稿規程改定案作成（規定を規程へ訂正）。
7 月 12 日
故松村昌家先生の追悼文を『論集』編集委員長に送る。
10 月 3 日
Zoom による三役会議開催。
10 月 7 日
Zoom による役員会議開催。
10 月 10 日（土）13.00-17.30
Zoom による第 32 回大会開催。
11 月 12 日
『ギャスケル論集』第 30 号発行。経費節約のため、役員名簿や投稿規程を表紙裏に移す。

2021 年
2 月 4 日
故多比羅眞理子先生のご主人へ協会より香典を送る際の挨拶文作成。
2 月 11 日
『ギャスケル論集』投稿規程改定版完成。協会 Home Page に upload。

4 月～6 月
会費納入依頼文書作成、*Newsletter* 作成支援、英国協会へ活動報告送付。
6 月 7 日
Newsletter（No. 33）発行。
8 月末
ドメインキングへ更新料払い込み（事務局経由）。
9 月 18 日（土）12.30-17.40
ディケンズ・フェロウシップ日本支部主催のもと「19 世紀イギリス文学合同研究会」準備大会が Zoom にて開催される。
10 月 8 日
Zoom による役員会開催。2 期目も会長職を引き継ぐことを総会に提起することが了承される。恒例により無投票。
10 月 9 日（土）
Zoom による第 33 回大会開催。第 18 期役員が了承される。
11 月 1 日
『ギャスケル論集』第 31 号発行。
12 月 3 日
2022 年大会と 2023 年大会のプログラム概要決定。
12 月 20 日
「19 世紀イギリス文学合同研究会」運営に関する最終案がまとまる。

2022 年
1 月 28 日
第 1 回「19 世紀イギリス文学合同研究会」（2023 年）の概要がまとまる。
4 月 1 日
第 18 期役員（敬称略）
副会長：閑田朋子／事務局長：芦澤久江／幹事：石塚裕子、大前義幸、木村晶子、桐山恵子、齊木愛子、杉村　藍、鈴木美津子、瀧川宏樹、松本三枝子、村山晴穂／会計監査：猪熊恵子、早川友里子
新たに、読書会担当幹事を設ける。
4 月～6 月
会費納入依頼文書作成、*Newsletter* 作成支援、英国協会へ活動報告送付。
6 月 1 日
Newsletter（No. 34）発行。
9 月 10 日
Zoom により第 1 回「19 世紀イギリス文学合同研究会」（ハーディ協会主催）のための準備委員会開催。
9 月 21 日
施設貸出申込書を日本赤十字看護大学に提出。
9 月 27 日
Zoom による役員会開催。
10 月 1 日（土）
第 34 回大会を日本赤十字看護大学広尾キャンパスにて開催（Zoom で中継）。『ギャスケル論集』第 32 号発行。
10 月 17 日
日本ギャスケル協会奨励賞応募規程案作成。

2023 年
１月～4 月
『北と南』改訳出版計画準備。
2 月～5 月
Newsletter 発行準備（会計報告、予算案、会費納入依頼文書作成等）。
5 月 3 日
次期会長を決めるにあたり、恒例により役員による投票を行う（Google Forms）。その結果、閑田朋子先生が得票第 1 位となる。

5月 11 日
Newsletter（No. 35）発行。
7月 3 日
『ギャスケル論集』を故小池滋先生の追悼号にする旨、ご息女小池智子様に伝える。
7月
査読担当編集委員による奨励賞審査。
8月 25 日
奨励賞論文選考規程改定に伴う投稿規程の改定案作成。
10月 1 日
『ギャスケル論集』第 33 号発行。
10月 2 日
役員会資料確認。
10月 4 日
Zoom による役員会開催。
10月 8 日（日）
同志社大学今出川キャンパスにて第 35 回大会開催。奨励賞論文選考規程、および投稿規程の最終案提示。第 1 回奨励賞が星志乃さんによる「エリザベス・ギャスケルの『ルース』における中産階級男性障害者の表象」に授与される。
10月 16 日
学会開催補助金決算書を大会校委員の玉井史絵先生に送る。
11月 4 日（土）
第 1 回「19 世紀イギリス文学合同研究会」（関東学院大学関内キャンパス）開催。
2024 年
1月末〜2 月初め
Newsletter 発行準備、2024 年大会プログラム概要決定。
3月 18 日
『北と南』の監訳者を、松本三枝子、金山亮太、大田美和の先生方にお引き受けいただく。
3月 31 日
『北と南』担当箇所の翻訳締切。監訳完了は 2025 年 3 月末、2025 年中に版下を作成し、2026 年 3 月末までには改訳出版予定。

ご多忙ななか、責任を引き受けてくださった役員の皆さまに謹んで感謝申し上げる。とくに事務局長として4年間献身的に支えてくださった芦澤久江先生に。

奨励賞が創設できたのはよかった。英文学に関心を持つ学生が年々減っていくなか、次世代のギャスケル研究者を育てたいという思いが強かった。

新体制に伝えるべき喫緊の事案は、名誉会員規定を協会会則から削除すること。つぎに、2027年の年次大会は「19世紀イギリス文学合同研究会」を兼ねること。さらには、もし2028年に協会創立40周年記念論文集を出すのであれば、前年度中に準備を整える必要があること。できれば、10年おきに記念論文集を出版することによって、Gaskell文学の魅力と協会の存在を世間に発信していきたい。

学会開催時期の件、重複会員の便を図るため、関係学会の会長と相談のうえ、原則として次のように開催すると合意する。

日本ギャスケル協会：10月第1土曜日
ディケンズ・フェロウシップ日本支部：10月第2土曜日（但し、年一度6月開催に変更されたため、この週は空いている）
日本ブロンテ協会：10月第3土曜日

在任中、もっとも協会員のGaskell愛を感じた出来事は、『北と南』の改訳出版プロジェクト。奇数月第2日曜の午後2時からオンラインで開催している読書会で話題になったのがきっかけだった。読書会メンバーの意気込みに押されて立場上音頭を取ったが、個人的に大切な研究計画を抱えている私は、初めは及び腰だった。ところが、この出版計画を会員に示し、翻訳希望者を募ったところ、あれよあれよという間に20名が集まった。Gaskell研究者としては、「これでは投げ出すわけにはいかない」と覚悟した。

奇数月第2日曜の午後2時〜４時にオンラインで開催している読書会。毎回10数名の参加者があり、自由に感想を述べ合いながらも、学ぶところが多い。該当箇所を読んでいなくてもまったく問題ない。その雰囲気をのぞき見るだけでも知的刺激を受ける。歓迎します。

当協会発足時（設立大会1988年、第１回大会1989年）からの会員は、現総会員数の10分の１になっている。重鎮が亡くなり、有望な大学教員が去り、いつの間にか私は年長者の部類に入ってしまった。世代は着実に交代している。Gaskellを主たる研究対象にしている学者は日本では数少ない。その一人として、Gaskell文学の魅力である「高潔な道徳観と敬虔な信仰に基づいた深い人間愛」を、これからも国内外に発信していきたい。協会はそのための拠点となるべき組織。力の限り支えていく。

◆◆◆新刊紹介（2023 年度）◆◆◆ （掲載情報は 2024年 3月15 日までに報告されたものです。）

・閑田朋子（共著）『比較文学で読む十一の出会い』（勉誠出版、3,080円、2023年8月31日）

・直野裕子（共著編）『Jane Austen, *Emma*, vol. III』(関西大学出版部、7,590円、2023年3月31日)

・松岡光治（訳）、ジョージ・ギッシング作『下宿人――お嬢さまの行儀見習い』（アティーナ・プレス、880円、2024年3月1日）

第 35 回大会レポート

日 時：2023 年 10 月 8 日（日）
同志社大学今出川キャンパス　良心館401教室
13:30 開会の辞 日本ギャスケル協会会長 大野龍浩（立正大学教授）
総合司会 齊木愛子（熊本大学非常勤講師）
13:35-14:05 研究発表　司会 遠藤花子（日本赤十字看護大学准教授）
「ストーリーとヒストリーのあいだ――『シルヴィアの恋人たち』を読む」
猪熊恵子（東京医科歯科大学准教授）
14:10-15:50 シンポジウム　「ナショナルな物語としてのギャスケル――統合と分断」
司会・パネリスト 金子幸男（西南学院大学教授）
パネリスト　伊藤正範（関西学院大学教授）
パネリスト　西垣佐理（近畿大学准教授）
15:50-16:30 総会
16:30-16:40 奨励賞表彰式
16:45-17:45 講演　司会 杉村藍（鳥取大学教授）
『北と南』における＜高慢＞と＜偏見＞――オースティンとギャスケル
廣野由美子（京都大学大学院教授）
17:45-17:50 閉会の辞 日本ギャスケル協会副会長 閑田 朋子（日本大学教授）

研究発表

「ストーリーとヒストリーのあいだ――『シルヴィアの恋人たち』を読む」

本発表では、まずは若き日のギャスケルとトマス・カーライルとの往復書簡をスタート地点として、偉大なる英雄の人生を選択的に取り上げるカーライルのロマン派的歴史観を確認した。そのうえで、ギャスケルはカーライルに比してどのような「英雄」を描いたのか、という問題意識に基づき、ギャスケル作品のなかでも歴史色の強い『シルヴィアの恋人たち』を取り上げた。作品分析を通して以下の２点―1）語り手のふるまいに注目すれば、そもそも全能の語りを思わせる迷いのない三人称的な語りの裏に、常に自らの限界をあえて曝露するような一人称的な語りが差し挟まれていること、2）この語りの両義性と響きあうようにして、シルヴィアの二人の「恋人たち」に関する英雄表象も、決して手放しの礼賛ではなく、常にその英雄性に疑義を呈するような皮肉が随所に見受けられること―を明らかにした。こうした分析に基づき、最後にヘスタ・ローズに注目することで、ギャスケルの描き出した静かな英雄の姿を確認し、『シルヴィアの恋人たち』というテクストが提示するギャスケルなりのフェミニズムや19世紀社会に馴化された形での英雄観を跡付けた。（猪熊恵子）

シンポジウム

「ナショナルな物語としてのギャスケル――統合と分断」

ギャスケル夫人が生きた19世紀前半、産業革命がもたらした都市化と工業化は「統合と分断」の時代をもたらした。本シンポジウムは、ギャスケル夫人が小説『メアリー・バートン』、『ルース』、『北と南』に描いた統合と分断の社会を分析し、いかなるネイション像、ナショナルな物語を呈示しているのかを見

ていった。（金子幸男）

『メアリー・バートン』における法廷の群衆と小説の語り――ネイションとの分断と統合

テクストの主軸に据えられた私的ロマンスと社会の支柱たる法的正義との統合が果たされているかに見える『メアリー・バートン』の法廷は、しかし実際には、さまざまな位相の分断が散りばめられた場である。とりわけ無罪判決を勝ち取ったジェムへと向けられる傍聴者たちの頑なな嫌疑のまなざしは、やがて主人公たちがイングランドの外部へと離脱するプロットを招き寄せていく。本発表では、都市化の進展や新聞の発達とともに大衆の力が増大しつつあるヴィクトリア朝の社会状況を見据えながら、群衆の作り出す思い思いのフィクションと小説の中心を構成する私的関心とのあいだに生じる分断について考察した。最終的に、主要登場人物たちが中産階級の作り上げる帝国主義的なネイションへと統合されていくエンディングに目を向け、ギャスケルの語りが複層的な分断と統合によって構成されていることを指摘した。また後のジョウゼフ・コンラッドやE・M・フォースターによる法廷場面を参照しながら、ギャスケルの語りをモダニズム期のそれへと向かう道筋に照射する試みを行った。（伊藤正範）

『ルース』における統合と分断――イングリッシュな物語は可能か

『ルース』は統合と分断の種をはらんだ小説である。本発表では『ルース』を孤児の身で私生児を生んだ堕ちた女が、イングランド社会にレディとして統合されていく話として読めるのかどうかを探る。ルース・ヒルトンの統合は、リスペクタブルなホームと職業を見い出せるかどうかにかかっている。お針子見習いをしていた仕立て屋も、青年蕩児ベリンガムと過ごした北ウェールズの宿屋も彼女のホームではない。エクルストンの町では事情を知る非国教徒の牧師ベンソン一家がホームを提供、名家の娘たちの家庭教師としても地歩を築くが、堕ちた女と知られ人々が彼女を遠ざけるのでベンスン家を除けばエクルストンもホームではない。折からのチフス蔓延に、彼女は改悛の行為として看護師となり信頼を回復する。リスペクタブルなチャリティ行為によりレディとして町に統合されたかに見えたルースは、ベリンガムの看病がもとで感染し亡くなる。本作品はイングリッシュなホームを見つけたナショナルな物語と言えるのだろうか。特にウェールズと海辺の保養地アバマウスの美しい自然、宗教的な改悛の情がこの読みにどうかかわってくるかにも触れた。（金子幸男）

『北と南』におけるジェンダー・イデオロギーの再構築――マーガレットとソーントンとの関係を中心に

『北と南』（1855）は、ミルトンとヘルストンという土地の対比、工場主と労働者といった社会階層、登場人物のジェンダー観など、様々な対立や分断を孕んだ物語である。ヒロインのマーガレットは、分断された諸々の要素を仲介する役割を果たす。ソーントンの工場における労使対立では、彼の専制君主的セルフ・メイド・マンとしてのあり方が対立を先鋭化させるが、彼女の介入によって暴動は回避され、彼の男性性は変化する。そして、男性性の変化によって労働者との関係も修復されることで、階級間の関係を再構築したといえる。また、マーガレットが近代的な経済主体となる点も注目に値する。彼女はベル氏からの遺産を受け取り、投資先としてソーントンの事業を選び、救済の手を差し伸べようとする。これは、女性が経済力を手に入れ、自分の意思で資産運用が可能な主体になったという点で、経済的にも男性と対等なヒロイン像の誕生といえる。本発表では、こうしたジェンダー・イデオロギーの再構築について、マーガレットとソーントンとの関係性の変化を中心に考察した。（西垣佐理）

特別講演

『北と南』における＜高慢＞と＜偏見＞――オースティンとギャスケル

ギャスケルの『北と南』からは、＜高慢＞と＜偏見＞によって対立しつつ惹かれ合う男女が、互いの誤解を解きながら成長し、結婚に至るというストーリーが浮かび上がってくる。したがって、本作品とオースティンの『高慢と偏見』とは、社会と個人の関係の問題に重点を置きながら、人はいかに振る舞うべきかという共通のテーマを追究している点で、底流でつながっていると言える。

他方、両作品にはいくつかの相違点があることも見逃せない。工場主や労働者などの新興階層が登場する『北と南』は、家柄・財産を基盤とした旧来の階級意識が支配する『高慢と偏見』と比して、社会の様相が変質・拡大している。また、結末において、エリザベスが玉の輿に乗って貴族的な社会に参入したのに対し、マーガレットが資本の持ち主として夫と共同事業をする兼業主婦になった点でも、両作品は大きく異なる。そこには、独身の女性作家オースティンと、牧師の妻としての「公務」を抱えつつ小説を書いたギャスケルとの、人生キャリア上の相違も反映されていると見ることができるかもしれない。（廣野由美子）

大会レポート

第35回大会は、同志社大学今出川キャンパスを会場に開催された。大会参加者は31名で、昨年よりも多くの人数が会場に集まった。大野龍浩会長が開会の辞を述べられ、和やかな雰囲気で大会がスタートした。

今大会は齊木愛子氏の総合司会により進行された。まずは遠藤花子氏の司会のもと、猪熊恵子氏による「ストーリーとヒストリーのあいだ――『シルヴィアの恋人たち』を読む」と題された研究発表では、歴史小説である『シルヴィアの恋人たち』のなかで、ギャスケルが「英雄」をどう描いたのかがカーライルやヘーゲルの歴史観を参照しながら考察された。

続いて金子幸男氏の司会進行で「ナショナルな物語としてのギャスケル――統合と分断」と題されたシンポジウムが行われた。伊藤正範氏による「『メアリ・バートン』における法廷の群衆と小説の語り――ネイションとの分断と統合」では、ジェムの巡回裁判の場面に着目され、センセーショナルな展開を期待する法廷の群衆と当事者たちとの分断について論じられた。つづいて金子氏は「『ルース』における統合と分断――イングリッシュな物語は可能か」という題で、charity、philanthropyといった概念はイングランド国家のアイデンティティであるという考えのもと、私生児を産み、社会から分断されたルースは慈善行為を通してイングランドという「家」に再び統合されたと言えるのか考察がなされた。西垣佐理氏による「『北と南』におけるジェンダー・イデオロギーの再構築――マーガレットとソーントンとの関係を中心に――」では、ソーントンの覇権的男性性が、マーガレットとのビジネス・パートナー的な対等な関係が構築される過程で変化するというジェンダー・イデオロギーの再構築によって分断の統合が示されていると指摘された。

総会後、杉村藍氏の司会のもと、廣野由美子先生にご講演いただいた。「『北と南』における＜高慢＞と＜偏見＞――オースティンとギャスケル」と題されたご講演では、『北と南』は「高慢」と「偏見」ゆえに相手を誤解した男女が最終的に結ばれるという点において『高慢と偏見』との類似があるということを出発点にギャスケルとオースティンの共通点を探ると同時に、二人の作家の置かれた環境の違いがマーガレットとソーントン、エリザベスとダーシーのそれぞれの関係性に違いをもたらしていると指摘された。最後に閑田朋子副会長が閉会の辞を述べ、開催にあたり尽力された先生方への感謝が述べられ、締めくくられた。研究発表、シンポジウム、講演と充実したプログラムで、大変学ぶことの多い、刺激的な大会であった。大会後、京都ガーデンパレスにて開かれた懇親会は、18名の参加があった。終始賑やかな、歓談が尽きることない盛会であった。（村上幸大郎）

2023年度役員会報告

役員会（日時 2023年10月3日（火）20：00～22：15　オンライン　Zoom）

① 現在の会員数は 72 名。
② 総会において協会運営基盤を整えられた鈴江璋子先生（第 2 代会長）を名誉会員に推薦し、感謝の意を表すことになった。
③ 19 世紀イギリス文学合同研究会は 11 月 4 日（土）に関東学院大学にて開催予定だが、懇親会の参加者が少なく、目標人数 50 名を下回っているため、不足分は各学会で負担する。
④ 『北と南』翻訳は 20 名の翻訳者が見つかり、作業に入っている。
2024年3月に分担の翻訳を提出（予定）、訳文の統一（監訳）を2025年3月までに、2026年3月に出版（予定）。
監訳担当者がまだ見つかっていない（数名に依頼したが断られたため、今後継続して依頼を続ける）。
⑤ 2022 年度会計報告、2023 年度予算案が承認された。
⑥ 新役員（2024年度～2025年度）は以下の通り（敬称略）。会長：閑田朋子、副会長：松本三枝子、事務局長：早川友里子、幹事：足立万壽子、大前義幸、金山亮太、木村晶子、桐山恵子、杉村藍、鈴木美津子、松岡光治、矢次綾、矢嶋瑠莉、監査：遠藤花子、村上幸大郎
⑦ 2024 年度大会開催校は岩手県立大学、2025 年度は立正大学にて行われる。
⑧ 奨励賞応募規程の改定を行い、細かな文言は三役に委ねることになった。

2023年度総会報告

総会（2023年10月8日（日）16時～16時30分　同社大学今出川キャンパス）

① 鈴江璋子先生を名誉会員とすることが承認された（後日ご本人から辞退）。
② 2022 年度会計報告、2023 年度予算案が承認された。
③ 2024 年度から 2025 年度の会長、並びに役員が承認された。

（芦澤久江）

事務局報告(2022年度)

2022年度(2022.4.1-2023.3.31)日本ギャスケル協会　会計報告

2022 年度一般会計予算

収入		支出	
前年度繰越金	1,066,840	通信費	50,000
年会費（含　英国）	446,000	大会費	150,000
		事務費	11,000
		印刷費	180,000
		英国協会費	90,000
		研究会費	3,000
		（小計）	484,000
		次年度繰越金	1,028,840
合計	1,512,840		1,512,840

2022 年度一般会計決算

収入			支出	
		内訳		
年会費	361,000	355,000（2022 年度一般） 6,000（2022 年度学生）	通信費	28,772
			大会費	20,900
			事務費	17,063
			印刷費	129,470
（小計）	361,000		（小計）	196,205
英国協会	98,000	96,000（2022 年度一般） 2000（2022 年度学生）	英国協会費	98,000
（小計）	98,000		（小計）	98,000
前年度繰越金	1,066,840		次年度繰越金	1,231,635
合計	1,525,840		合計	1,525,840

上記の通り相違ありません。
日本ギャスケル協会 2022 年度事務局長　芦澤久江
上記の通り相違ありません。
日本ギャスケル協会 2022 年度会計監査　猪熊恵子
上記の通り相違ありません。
日本ギャスケル協会 2022 年度会計監査　早川友里子

2023年度日本ギャスケル協会予算案（2023年4月1日～2024年3月31日）

2023 年度一般会計予算案

収入		支出	
前年度繰越金	1,231,635	通信費	50,000
年会費（含 英国協会）	454,000	大会費	150,000
		印刷費	180,000
		事務費	20,000
		19 世紀イギリス	20,000
		文学合同研究会費	
		英国協会費	98,000
		(小計)	518,000
		次年度繰越金	1,167,635
合計	1,685,635	合計	1,685,635

日本ギャスケル協会第36回大会予告

2024年10月5日（土） 於・ 日本大学文理学部世田谷キャンパス

総合司会： 石井麻璃絵（東京工芸大学助教）
〇開会の辞 13:00-13:05　日本ギャスケル協会会長 閑田朋子 (日本大学教授)
〇研究発表1 13:05-13:35 司会：閑田朋子（日本大学教授）
　柏木いずみ（日本大学大学院博士後期課程）
「ギャスケルの物語として読む『北と南』――信仰とやさしさに支えられて」
〇研究発表2 13:35-14:05 司会：加藤　匠（明治大学兼任講師）
　太田裕子(慶応大学非常勤講師)
「ギャスケル作品とユニテリアン女性作家の伝統」
〇シンポジウム 14:15-15:55
司会・パネリスト： 松浦愛子（名城大学准教授）
　　パネリスト： 石井明日香（東京学芸大学非常勤講師）
　　パネリスト： 矢嶋瑠莉（北里大学非常勤講師）
「19世紀イギリスにおける共感」
〇総会 16:05-16:35
〇講演 16:40-17:40 司会：西村美保（名古屋学院大学教授）
　大田美和（中央大学教授）
「ギャスケルのマンチェスター」
〇閉会の辞 17:40-17:45
　日本ギャスケル協会副会長 松本三枝子（愛知県立大学名誉教授）

◆◆◆研究会予定◆◆◆

ギャスケル作品の読後感を自由に語り合い鑑賞する研究会です。今年度は以下の作品を取り上げる予定です。

2024年

5月12日　*North and South*, Chs.25-28 中越亜理紗／河井純子

7月14日　*North and South*, Chs.29-32 河井純子／江澤美月

9月15日　*North and South*, Chs.33-36 早川友里子/齊木愛子

11月10日　*North and South*, Chs.37-40 齊木愛子／濱奈々恵／金山亮太

2025年

1月12日　*North and South*, Chs. 41-44 金山亮太／木村正子

3月9日　*North and South*, Chs. 45-48 太田裕子／足立万寿子

5月11日　*North and South*, Chs. 49-52 足立万寿子／遠藤花子/大野龍浩

日　時：奇数月　第2日曜日　午後2時～午後4時

※原則としてZoomによる開催。日程等に変更がある場合は、日本ギャスケル協会HPに掲載いたしますので、新着情報をお確かめ下さい。皆様のご参加をお持ち申し上げます。

編集後記

昨年度に引き続き編集の際にはこれまで事務局長を務めて下さった芦澤久江先生に、NLのアップなどの際には松岡光治先生に大変お世話になりました。今後への熱いエールをこめた巻頭エッセイを執筆して下さった大野龍浩先生、第35回大会にご参加くださり、お忙しい中あらためて原稿をお寄せ頂きました先生方にも御礼を申し上げます。（編集　桐山恵子）

発行：日本ギャスケル協会
〒102－8357 東京都千代田区三番町12番地
大妻女子大学文学部英語英文学科
早川友里子研究室
URL: http://www.gaskell.jp/
Email: yurikohayakawa@otsuma.ac.jp
発行日：2024年5月1日